

(3) カワムツ・ヌマムツ (コイ目コイ科)

① 分布

最下流域の一部を除く集落

② 主に見られた場所

川, 水路など

③ 採録した呼び名

- ・ 雌, 稚魚, 総称 ハイ, ハイタ, ハエ, ハヨ, ハヨー
- ・ 大型魚 イワモツ, シロモンツ, タニバエ, タニバヨ, ホンバヨ, モツ, ムツ, ヤナギバイ, ヤナギモツ, ヤマバヨ, ヤマモツ, ヤマムツ
- ・ 雌 ドテモツ
- ・ 薄い婚姻色 サクラムツ
- ・ 婚姻色 アカダ, アカバイ, アカバチ, アカバヨ, アカバリ, アカムツ, アカモツ, アカモチ, アカモンツ, ニギタイ, ネギタイ, ヤナギモロコ



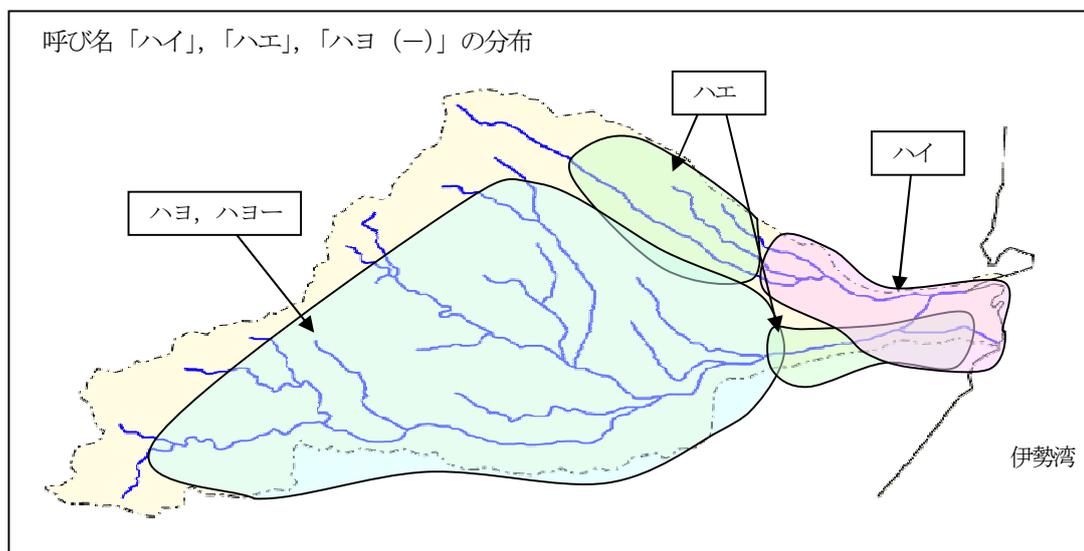
④ 分布と呼び名について

上中流域を中心として, ほぼ流域全域の川の本支流や水路などでよく見られたという。

呼び名としては, 「ハヨー」など雌, 稚魚, 総称としてのものをはじめ, 大型魚, 婚姻色のものなど計 31 種を採録した。

オイカワとともに旧鈴鹿郡を中心とした上中流域では「ハヨ」又は「ハヨー」, 下流域を中心とした旧三重郡及び四日市市では「ハイ」, 旧河芸郡一ノ宮村及び旧小山田村・旧水沢村にかけての地域では「ハエ」と呼ばれる傾向にあったほか, オイカワと区別し, 「モツ」又は「ムツ」と呼ぶ集落も数多く見られた。大型魚となり特徴が出てくると「ヤマモツ」, 「タニバヨ」等, 生息場所からの呼び名が見られたとともに, 加太地区では「ホンバヨ」と呼ばれた。

また, 赤い婚姻色が出ると, アカ (赤) という体色を表した言葉を冠した「アカモツ (又はアカムツ)」という呼び名はほぼ流域全域から採録され, 流域で最も一般的な呼び名となっていたほか, 集落により「アカバイ」, 「アカバチ」, 「ニギタイ」などと呼ばれた。



⑤ その他

50 歳代の住民が本種の婚姻色の成魚を「ヤナギモロコ」と呼ぶ集落がいくつか見られ, 調査対象年代との呼び名の相違が見られた。

(3) -2 オイカワ (コイ目コイ科)

① 分布

最上流域の一部を除く集落

② 主に見られた場所

川, 水路など

③ 採録した呼び名

- ・ 雌, 稚魚, 総称 ハイ, ハイタ, ハエ, ハヨ, ハヨー
- ・ 大型魚 シラハイ, シロハイ, シラハエ, シロハエ, シラハヨ, シロハヨ, シロモンツ, ジンジョ
- ・ 薄い婚姻色 サクラ
- ・ 婚姻色 アオバエ, アカシャジ, アカダ, アカダイ, アカタン, アカテ, アカネ, アカネンブツ, アカバイ, アカバエ, アカバチ, アカババ, アカバヨ, アカヒゲ, アカヒデ, アカヒレ, アカムツ, アカモツ, アカモチ, アカモンツ, アカンド, オヒメサン, カスナギ, カスネギ, カタ, ガラ, ガンガ, ガンガラ, ガンガン, シャジ, タビラ, トビ, ドンガラ, ネギシヨン, ネギソウ, ネギタ, ネコマタギ, ババクイ, ハビラ, ヒデ, ヒレ, マルモツ, メンタバイ, メンバイ, ヨメサン



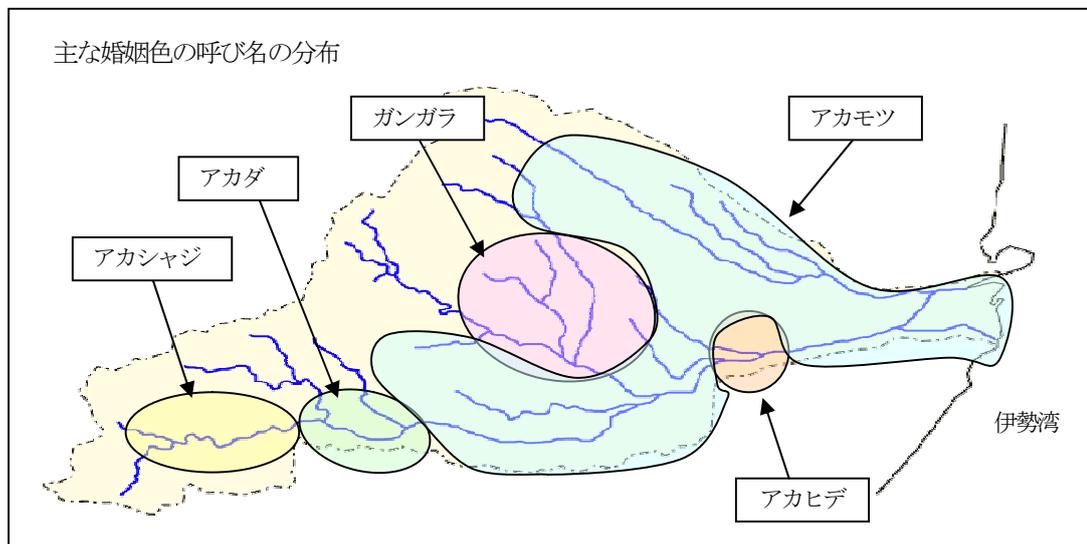
④ 分布と呼び名について

中下流域を中心として, 流域全域の本支流や水路でよく見られたという。但し, 婚姻色のものは本川でよく見られたという話が聞かれ, カワムツ類に比べ本川にいる傾向が強いようである。

呼び名としては, 「ハヨー」など雌, 稚魚, 総称としてのものをはじめ, 白い体色や婚姻色のものなど計 59 種を採録した。とりわけ, 婚姻色のものについては, 46 種と多様な呼び名が見られた。

総称としては, カワムツ等とともに旧鈴鹿郡を中心とした上中流域では「ハヨ」又は「ハヨー」, 下流域を中心とした旧三重郡及び四日市市では「ハイ」, 旧河芸郡一ノ宮村及び旧小山田村・旧水沢村にかけての地域では「ハエ」と呼ばれる傾向にあった。大型魚となると, その白い体色から流域全体で「シラハエ」又は「シラハヨ」などと呼ばれるとともに, 「シロモンツ」, 「ジンジョ」と呼ぶ集落も見られた。(婚姻色の成魚を「アカモツ」と呼ぶ集落が広く見られることから, 本種もカワムツと同様に, 総称として「モツ」と呼ばれた可能性がある。)

また, 雄が成魚となり虹のような婚姻色が出ると, 「アカヒデ」, 「アオバエ」などアカ (赤) やアオ (青) という体色を表した言葉を冠した呼び名が多く見られたほか, きれいな色から「オヒメサン」, 「ヨメサン」, 柄模様から「ガラ」, 「ガンガラ」, また苦い食味から「ネコマタギ」など集落により多様な呼び方がされていた。なお, 加太地区の呼び名である「アカシャジ」は, 伊賀地域でも同様に呼ばれていたことからその影響と見られる。



(3) -3 アブラハヤ・タカハヤ (コイ目コイ科)

① 分布

主に最下流域を除く集落

② 主に見られた場所

川, 水路, 湧水地など

③ 採録した呼び名

- ・ 固有名 イシモロコ, イヤシイ, ウシモロコ, ドロ, ドロバヨ, ドロバイ, ドロバエ, ヤナ, ヤナギバヨ, ヤナギモロコ, ヤナタ
- ・ その他 ハヨ, ハヨー (カワムツ等との混称)
モロコ (タモロコとの混称)



④ 分布と呼び名について

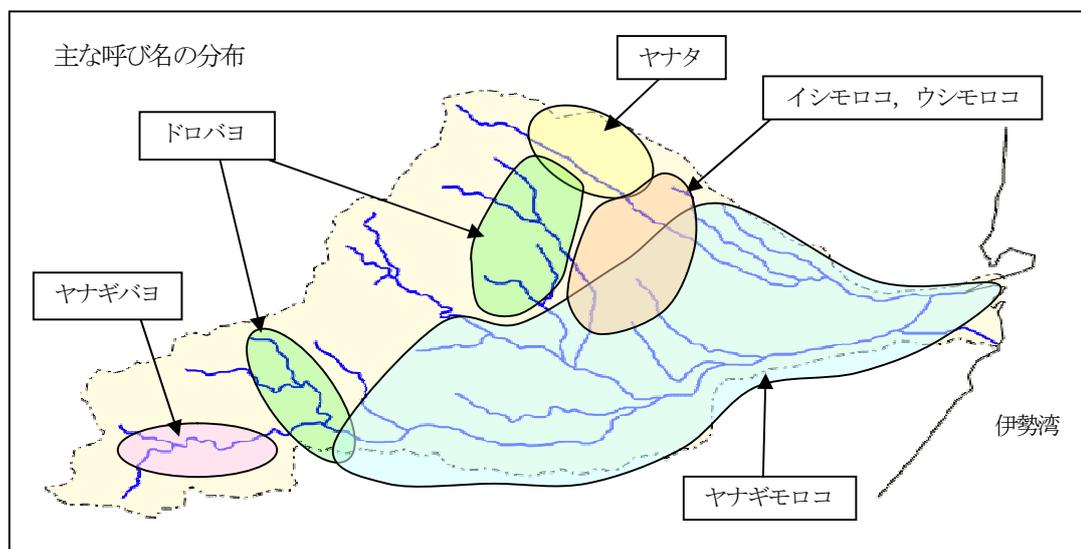
主として上中流域を中心とした川や湧水の水路でよく見られたという。

本来, 上流域や湧水といった冷水域に生息する魚種であるが, 広範囲から呼び名を採録したことから, かつての分布範囲は流域全体にわたっていたものと見られる。

呼び名としては, 「ヤナギモロコ」をはじめ, タモロコとの混称である「モロコ」を含め計 14 種を採録した。

中下流域の広い範囲で「ヤナギモロコ」を採録したほか, 加太地区では「ヤナギバヨ」, 坂下地区及び庄内地区から椿地区にかけては「ドロバヨ」, 深井澤地区から小山田地区にかけては「イシモロコ」, 「ウシモロコ」, 水沢地区では「ヤナタ」と呼ばれた。

なお, 安楽川の上流域 (亀山市安坂山町安楽より上流) では, 本種についての生息情報や呼び名が採録されなかったことに加え, 別に実施の魚類相調査においても生息が確認されず, 本来, 上流域に生息する魚種であるにもかかわらず, 生息を示す情報が得られなかった。



⑤ その他

本種は, 現在, 上流域及び湧水のある中流域においてのみ確認されているが, かつての鈴鹿川流域は湧水が豊富で, 多くの場所に冷水環境があったと見られることから, 広い範囲に分布していたものと考えられる。

(3) -4 ウグイ (コイ目コイ科)

① 分布

中下流域の集落

② 主に見られた場所

川, 水路

③ 採録した呼び名

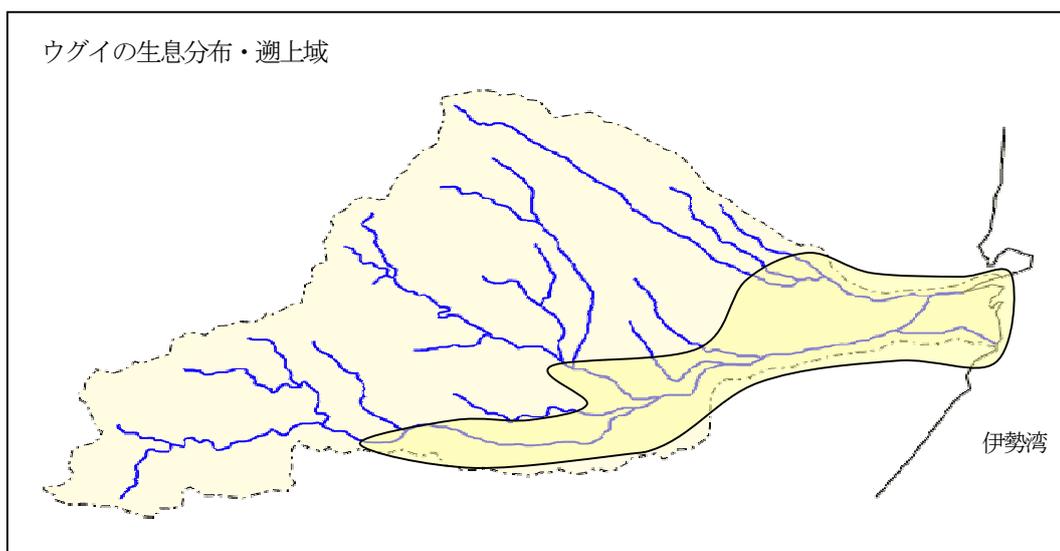
- ・ 標準和名 ウグイ
- ・ その他 ヤマウグイ
- ・ カワムツ等との混称 モツ

④ 分布と呼び名について

下流域の川を中心として生息情報を採録する一方, 中流域のいくつかの集落で「小骨の多い魚」など, 本種の特徴を示した話が採録された。このことから, 本種は下流域から中流域にかけて広く分布していたものと見られるが, 流域住民には他種との違いをはっきりとは認識されていない傾向にあることが伺われた。

呼び名としては, 標準和名である「ウグイ」をはじめ, 「ヤマウグイ」, 「モツ」の計3種を採録した。

本種が主として生息するのは中下流域であるが, 鈴鹿川や内部川といった幹川では, 渇水期に, 表流水が絶えることがしばしばあったため, 生息数が多くなく, かつ体型が似て, 生息数が多いカワムツやオイカワ等と明確に区別されず, ともに「ハイ」, 「ハヨ (-)」や「モツ」と呼ばれていたものと見られる。



⑤ その他

最下流域の集落において, 「ウグイのクソグイ」, 「ウグイのババクイ」という言葉を採録したが, 本種は食べて美味しくないことからそのような呼ばれていたものであるという。

(3) -5 モツゴ (コイ目コイ科)

① 分布

最上流域を除く集落

② 主に見られた場所

川, 水路, 池など

③ 採録した呼び名

- ・ 生息場所+コイに似たこと
カワゴイ, ドテゴイ, ドブゴ
イ, ミゾカワゴイ, ミゾゴイ,
ミトゴイ
- ・ その他 ニゴイ, フナゴイ
- ・ タモロコとの混称 モロコ



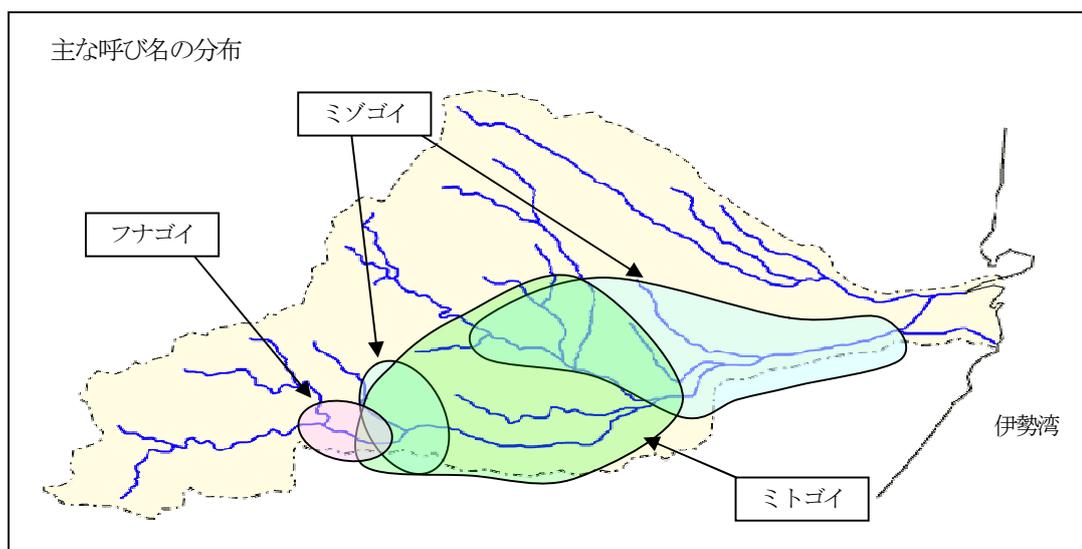
④ 分布と呼び名について

上流域から下流域にかけての川, 水路, 池などでよく見られたという。

呼び名としては, コイに似た体型であることから, 「コイ」という言葉がついたものが一般的であり, 普通のコイと区別し, 細い溝川や水戸近くでよく捕獲されたことから名付けられたと見られる「ミトゴイ」や「ミゾゴイ」をはじめ, タモロコとの混称を含め, 計9種を採録した。

鈴鹿川本流の中流域を中心に「ミトゴイ」が, また中下流域では「ミゾゴイ」が広く採録されたほか, 関町の一部では「フナゴイ」と呼ばれた。

一方, 旧三重郡の集落や最下流域では, 四日市市波木町や鈴鹿市長太旭町を除き, 固有の名称が採録されず, 生息状況もはっきりとしない傾向にあった。



⑤ その他

写真を用いた聴き取りでは呼び名が見られず, 生息状況がはっきりしない一部の集落において, 本種の実物確認を行ったところ, 「本種が生息していた」という話が聞かれたことから, 固有の呼び名や生息情報が得られなかった旧三重郡などの地域においても, 本種は生息していたものと見られる。

なお, 調査とは別に, 一部の中高年層から「クチボソ」という東京の一地域の呼び名が時折聞かれたが, これはマスメディアにより広まった言葉と見られる (※ そういった人に, 子どもの頃の呼び名を尋ねると, ほとんどが「ミトゴイ」又は「ミゾゴイ」と呼んだと答えた)。

(3) -6 カマツカ (コイ目コイ科)

① 分布

最上流域を除く集落

② 主に見られた場所

川, 水路

③ 採録した呼び名

- ・ 砂にもぐり隠れること イシムクリ, イシモグリ, ザリモグリ, スナホリ, スナホレ, スナムクリ, スナムグリ, スナモグリ, ホリハゼ, ホレ
- ・ 海の魚 (ハゼ, コチ, キス類) に似た形状 アサキス, イシハゼ, カワゴチ, カワハゼ, キス, コチ, シマハゼ, シラハゼ, スナハゼ, ハゼ, ハゼモツ
- ・ その他 イシモツ, カンソ, カンツ, ゲンソ, スナクイ, スナズリ, ゼンモツ, ゼンモン, ドボ, ドンボ, ホウセ, ホウセン, ホウセンボ, ホセ, ホゼ, ホセンボ, レンポウ
- ・ ドンコとの混称 ドンコ (混称)



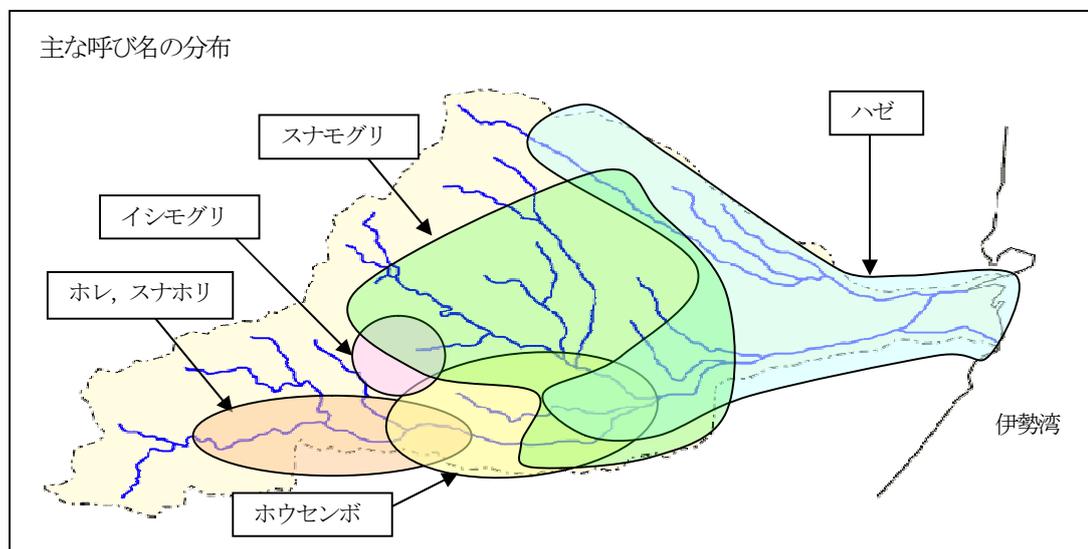
④ 分布と呼び名について

ほぼ流域全域の本支流でよく見られたという。

呼び名としては、川底の砂にもぐり隠れるという特徴から名付けられた「スナモグリ」をはじめ、汽水域などに生息するハゼや海の魚であるキスに似た姿であることからのものなど計39種を採録した。

中下流域及び旧三重郡においては、「ハゼ」に由来する呼び名を広く採録したほか、安楽・御幣川流域を中心とした地域では「スナモグリ」、旧井田川村から旧亀山町にかけて「ホウセンボ」、関・加太地区においては、「ホレ」、「スナホリ」、また、亀山市白川地区では「イシモグリ」などと呼ばれた。この他、地域的に広がりはないものの、各集落固有の呼び名がいくつか見られた。

なお、関・加太地区において採録した「スナホリ」は、伊賀・甲賀地域においても同様に呼ばれていたことから、その影響と見られる。



⑤ その他

旧関町を中心とした地区においては、冬に長いジョレンで川底を掻き、本種を取る「ホレかき」と呼ぶ漁法があったという。